



Title	民族教会と女性、そして愛をめぐって－在日大韓基督教会对するジェンダー論的な“読み”を試みる
Author(s)	崔, 恩珠
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59379
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	崔 恩 珠
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 9 1 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 9 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	民族教会と女性、そして愛をめぐる－在日大韓基督教会に対するジェンダー論的な“読み”を試みる
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 川村 邦光 (副査) 教 授 杉原 達 教 授 富山 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、民族教会としての在日大韓基督教会（戦前、在日本朝鮮基督教会）内で、女性信徒の行う奉仕・献身、「愛の実践」をめぐる、ジェンダー論的な視点から考察する。キリスト教の説く愛が母性愛のような女性というジェンダー特有のものとみなされ、民族教会への自己犠牲を強いられている点を問題視し、それがどのように実践されているのか、女性信徒の教会活動を歴史的に分析して、この愛のもつ可能性を論じている。

序章では、在日大韓基督教会に関する先行研究を検討し、その歴史や神学、信徒に関する研究はあるものの、女性信徒に関する女性学的研究はきわめて少ないことを指摘し、民族的視点ではなく、その民族教会としての性格を踏まえ、「ジェンダー論的な“読み”」を試みることを提起する。また、キリスト教や民族教会における愛の概念を批判的な視点のもとで検討し、「愛の実践」のもつ可能性を探ることを課題として設定する。

第 1 章では、戦前、カナダ長老教会の宣教師が布教のために採用し、教会の発展に寄与したバイブル・ウーマンの活動について考察する。そして、その影響下で女伝道会の自己犠牲の精神を培った「誠米」という奉仕が伝統化され、女性信徒の奉仕領域が設定され、教会内のジェンダー的秩序が構築されるにいたった歴史的経緯を明らかにしている。

第 2 章では、「誠米」奉仕の伝統化のもとで形成された「オモニ信仰」に関して、女性会によって担われた釜が崎炊き出し奉仕を具体的な事例として取りあげて検討し、女性信徒の奉仕・献身を民族愛や信仰の愛へと解釈・還元してしまう、民族教会のオモニ信仰における自己犠牲的な母性愛、つまりジェンダー化された愛について考察する。

第 3 章では、戦中に在日大韓基督教会は解散と日本基督教団への吸収合併を強いられたが、戦後、日本基督教団と宣教協約を結び和解するにいたり、この和解の論理が民族教会内にもいかに適用されたのかがジェンダー論の視点から問い直される。民族教会内では、オモニ信仰を基盤にし、二元的なジェンダー観と母性愛イデオロギーが貫徹して公私領域

を区分し、ジェンダー化された女性の私的領域が存続してきたことを明らかにしている。

第 4 章では、女性信徒が「愛の結晶」とする、老人ホーム「セツトンの家」建設のプロセスにおける教団内での女性信徒の活動を分析して、「愛の可能性」について考察する。「セツトンの家」建設はオモニ信仰の継承と実践の成果であったとともに、民族教会内で二分化されたジェンダー的秩序に対する異議申し立てでもあったとし、教会内で伝統化されたオモニ信仰と女性信徒の具現したオモニ信仰の相違が検討され、「セツトンの家」建設における愛のもつ力と可能性、もしくは政治化された愛の可能性について考察する。

終章では、全体をまとめるとともに、女性信徒のオモニ信仰を基盤にした愛の実践が教団内でのジェンダー的秩序のもとで絶えず二義化されていることに関して、さらなる検討が加えられる。女性信徒の感情・感性のレベルに立脚した愛の実践、教会活動への奉仕・献身は教会の存立・存続にとって不可欠のものであり、その実践は政治的な力となり、二義化され従属化された女性信徒の位置を反転させる可能性をもつことが示される。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、民族教会としての在日大韓基督教会の発展を基礎づけた、バイブル・ウーマンから議論を始めたところが、申請者の問題意識に基づいた大きな特徴であるとともに、そこから申請者のテーマが連鎖的に浮き彫りにされ、方法論的にはジェンダー論・女性学の視点から、すぐれてボレミカルな議論が展開されている。以下、申請者のテーマと関連させ、3 点にわたって、評価すべき点を述べていこう。

第 1 に、1928 年から宣教師ヤング牧師が在日朝鮮人への伝道のために採用した朝鮮人女性のバイブル・ウーマンの伝道活動の実態を資料に基づいて明らかにしたことがあげられる。このバイブル・ウーマンを指導者とする女伝道会は、一匙の米を教会に献納する奉仕「誠米」を始め、戦後も女性信徒に引き継がれて、民族教会内に二分化されたジェンダー的秩序が形成され、一世オモニ・女性信徒の苦難の歴史の象徴として「オモニ信仰」が培われて、それが民族教会の伝統、また精神的支柱とされたことを明らかにしている。

第 2 に、釜が崎炊き出し奉仕や老人ホーム「セツトンの家」建設を事例として分析し、オモニ信仰が教会の総会側と女性連合会とでは解釈・意味づけに大きな相違・隔たりがあったことをジェンダー論的な視点から詳しく精緻に分析している点を評価できよう。総会側から女性信徒は「宗教的血縁共同体」たる民族教会のオモニとなって、無条件的な愛、母性愛を施すことが期待されており、この自発性を調達する母性愛のイデオロギーが女性信徒に対する抑圧・差別の民族的イデオロギーとして働いている一方で、女性信徒自身の自己犠牲には忍耐強いとされた一世オモニ像とは異なった献身的な奉仕、すなわち「愛の実践」を自分の喜びとする、感性・感情での自己解放があり、世代を超えた女性同士の連帯感を培っていったことを明らかにしている。

第 3 に、「セツトンの家」建設における韓国語のミッチョッジ（どうかしてた）という咬きや入信契機としての「外出」の意義が考察され、そこに女性であるが故に制限された奉仕領域を突破し、ジェンダーの偏見またジェンダー的秩序に対して挑戦する女性信徒の連帯を指摘し、オモニ信仰を継承し基盤にした「愛の実践」の可能性に関して展望しているところは、ジェンダー論の視点に基づいた女性学研究における大きな成果である。

本論文は、戦前から現在にいたる在日大韓基督教会の女性信徒におけるオモニ信仰の展開を中心にして、文献研究のみならず、聞き取り調査も踏まえて、ジェンダー論の視点から考察したすぐれたものである。ただ戦後の在日朝鮮・韓国人の政治的・社会的な位置との関連で民族のもつ意義、指紋押捺拒否運動などでの教団内での女性信徒の活動についてさらに掘り下げて考察したなら、信仰と民族とジェンダーという問題をより深化させることができたと考えられる。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていくうえでの課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。